



自著紹介

『研修医のための臨床心エコー： 診断へ導く撮り方・読み方』

(文光堂、2016年2月)

田邊 一明

(島根大学医学部医学科内科学講座内科学第四教授)

本書は初期研修医や新専門医制度での内科専攻医、循環器の勉強を始めた方を対象とした心エコーの入門書です。携帯できて、ベッドサイドや救急外来で心エコーを記録するときに、あるいは検査レポートを解読する時に“指導医”となってくれるような本を目指しました。

前立腺がんを早期発見するためのスクリーニング検査としてPSA (prostatic specific antigen) があります。PSAは早期がんの発見のためのスクリーニング検査として行われるほか、進行がんの診断や治療経過をみるうえでもとても重要なマーカーとなっています。心エコー検査の役割は、もちろん心血管疾患の診断であり、他の検査や適切な治療を行うためのきっかけになります。しかし、心エコー検査の役割がPSAなどの血液マーカーと決定的に違うのは、所見が検者に依存するというこ

とです。PSAは血液採取すれば検査値が出てきて、基準値内かどうかという判断が即座にできます。

循環器診療においては、

- 1) 問診や身体診察（特に聴診は重要）で疾患をピックアップ
- 2) 胸部X線写真、心電図で診断を深める
- 3) 心エコーやCT、心臓カテーテル検査、血管造影と進み、最終的な診断を確立する

というのが正しい流れと言えます。心エコーはPSAのような単独の指標で異常と正常を区別することのできるものではありません。異常と診断するためには基本的な計測に加えて心機能や心血管疾患の知識が要求されます。所見のある心エコー画像を観察し、これは“おかしい”と思えるかどうかにかかっています。そのためには、疾患に特徴的な画像を覚えることが重要です。基本

断面の描出をマスターし、正常の心エコー画像とはどういうものか、また計測項目の正常値・基準値を把握しておくことが必要となります。症例や経験を重ねると、各心血管疾患における特徴的な心エコー画像のパターンを覚えてくるものです。同時に、なぜそのような特徴的なパターンが出現するのかについての病態を理解できるようになります。病態がわかると、この症例はきっとこのようなパターンが認められるはずだと想定しながら検査に向かうことができ、おのずと効率よく目的とする画像描出に到達することができるようになるはずです。

心エコーに課せられた役割は年々多くなり、装置の進歩、新しい機能や指標が登場し、勉強することが増えていきます。最初から学ぶ量は膨大です。私のMayo Clinic留学時代の師であるJames B. Seward先生から「心エコーの進歩についていける

ようにすべて勉強しなさい」と激励していただきました。みなさんにもSeward先生の言葉をそのまま贈りたいと思います。

心エコー上達のためにはベッドサイドや検査室で経験を積んでいくしかありません。正しい断面を覚え、記録しながら考えるという作業を繰り返すことが必要です。やがては自分の心エコー診断がその後の治療や経過にどう影響したかという経験も診断能を上げるためには必要です。本書には筆者自身が経験してきたこと、日々の診療で実際にやっていること、研修医の先生方や循環器の勉強を始めた先生方に指導していることを詰め込みました。本書は心エコーの「導入」に重点を置いたものであり、網羅できていないことはたくさんあります。まずは心エコーの窓から覗く心臓、大血管、心機能や血行動態に興味を持っていただける機会になることを願っています。

